
あの頃、君は知らなかった。

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃、君は知らなかった。

【Nコード】

N2339T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

戦争止まぬ世界で、唯一どこの干渉も受けずに存在する地域。

そこにある児童施設に、他人を嫌う少年がやってきた。

様々な人々と関わり合うことによって、彼はだんだんと変化していく。

サイト、dノベ転載

あの頃、君は知らなかった。 < 1 >

どこの国にも属しない土地があった。

その土地にあるのは、世界の中枢をなす機関、重要な施設だ。

そこに、一つの児童施設があった。

世界各地で起きる戦争や天災などによって、一人になった子供達を保護する施設だ。

その施設の前に今、黒く光る車が止まった。

車が止まってすぐ、施設の入り口から明るい茶髪の青年が出てきた。

そして、黒塗りの車からは、黒いスーツに身を固めた男性二人と、その男性に両脇を抱えられた金髪をぼさぼさにした少年が出てきた。

「君がキール君ですか。はじめまして、私はここの施設の管理を任されてるセシドといいます。これからよろしくお願いします」

セシドと名乗った茶髪の青年は、黒服の男達を手でそれとなく後ろに下がらせ、キールを立たせ、その前に近づいた。

キールと呼ばれた少年は、セシドを睨みつけていた。まるで子供のするような目ではなかった。

セシドはそれでも最初に浮かべていた笑顔は変えず、そつとキールの背中に手を回す。

そして、黒い男達の方に首だけ振り向く。

「ご苦労様でした」

キールにしたのとは違う、鋭い笑顔と重い声だった。

それで男達は車の中に入り、その車と共に遠く去っていった。

「さ、中に入るうか」

車が消えるまでセシドは見送ってから、また笑顔に戻り、キールを施設の中へ促した。

「今日からここが君の住む所だよ」

セシドがキールの後ろについて、施設内を歩いていた。

「あ、セシドさんだ」

「ほんとだ」

施設の広間のような場所に來ると、そこにいた様々な年齢の子供達がセシドを見つけ近寄ってきた。

「そのお兄ちゃん誰？」

「新しく来た人？」

キールにもすぐ目を止め、口々に言う。

「うん、キールっていうんだよ。みんな仲良くしてね」

セシドがキールの両肩に手を置き、少し前に押した。

キールは相変わらず仏頂面だった。

「セシドさん」

すると、広間の奥の廊下から少女の声が聞こえてきた。

「あ、アイネ、いい所に来た」

セシドは廊下からやって来た、アイネと呼ばれた黒髪を後ろで一つにまとめた少女を手招きした。

「その子が新しく来たキール君ですか？」

アイネは小走りにセシドのもとに駆け寄ってきた。

「ああ。今日から君にキール君を担当してもらおうと思うんだ」
セシドは笑顔で言ったが、それを聞いたアイネの表情は硬くなっ
た。

「い、いきなりですね……」

アイネは強張った表情のまま口だけ動かす。

「うん、ちょうどいいと思って。さっそく今からキール君に施設を
案内してあげて」

「あ……はい」

セシドはアイネの方にキールを押しやる。子供達は自然と二人の
間を空けた。

アイネは、不安そうにセシドを見ながらキールを受け取った。

「アイネだけ？」

脇にいた子供達が、キールの顔とアイネの顔を交互に見ていた。

「ああ、アイネだけ」

セシドは笑顔で子供達に言った。

そしてアイネは今、キールと一緒に施設内を歩いていた。

「ここが寝る所ね」

両脇に木製の扉が並ぶ廊下を歩きながら、アイネは言う。

キールは仏頂面で黙ったままだ。

「ここが君の部屋ね。私と二人部屋だよ」

アイネが一つの部屋の前で立ち止まり、手で指し示した。
そこでキールも立ち止まって、指された方向を見る。

「中も見る？」

動きを見せたキールの顔に、アイネは自分の顔を近づけて聞く。
キールは首だけ動かして、肯定の意を示した。

「それじゃあ、中に入ってみようか」

アイネは笑顔で扉を開けた。

部屋の中には、両脇にそれぞれベッドと机があり、入るとすぐに縦に長い窓、入り口側の左にはクローゼット、右には細々したものを入れる引き出しの棚があった。

キールは中に入り、部屋をゆっくりと見回した。

そして、同じようにゆっくりと部屋を歩き回る。

アイネは入り口からその様子を見ていた。

一通り部屋を見ると、キールは満足したのか入り口の方に来た。

アイネがよけると、キールは部屋を出て、また二人は歩きだした。

「ここは食堂よ」

宿舎から今度は食堂に二人は来た。

壁一面に窓があり、暖かい光が大きなテーブルに降り注ぐ。

そこはすぐに歩き去り、その奥へと入る。

「こっちが厨房。当番を決めて、みんなで食事を作るの」

食堂の奥には厨房があり、アイネが入り口で説明をすると、キールはまた中に入っていった。

鉄色に光る厨房の中を二人で歩く。

と、キールはすぐに立ち止まり、側にあつた流し下の棚を開け、扉についていた包丁を一本取り出して、アイネに向けた。

アイネは一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに表情を引き締め、キールと対峙する。

「何のつもり？」

「殺されなくなかったら、俺の言うことを聞け。俺をここから出せ」

キールはアイネをじつと睨む。

アイネはキールを気にしつつ、辺り見回し、手近にあったモップを手に取った。

「悪いけど、あなたの言うことをきくわけにはいかないの」

そう言っつて、アイネはキールに対してモップの柄を向ける。

キールは口の端を持ち上げ、嘲るように笑った。

「じゃあ、しょうがないな」

言い終わるか終わらないうちに、キールはアイネに飛び掛かってきた。

アイネはそれをすれすれで右へ避け、モップの柄を立て、伸ばしたキールの腕の間接に柄を押しつけ、台の方へ倒した。

キールの体も倒れ、腕が押さえられているために動けない。

「話には聞いてたけど、本当にとんだやんちゃ坊主ね。しかも訓練受けてるだけあって、動きがいいわね」

アイネは暴れるキールを押さえながら言った。

「うるさい！ 離せ！」

「君のことはちゃんと事前にみんなに話されてるんだ。みんな、君が誰でもすぐに傷つけようとする子だって知ってるんだから」

途端にキールは動きを止めた。

「どういうことだ」

「私達は、子供は大人が思ってるより物事をわかってることを認めてる。だから、ここにいる全ての子供達が互いにフォローし合ってるの。あなたも、ここにいればわかるわ」

そこまで言っつて、アイネはどうしようかと辺りを見回した。

が、何か思い直したようで、キールを離れた。

キールもおとなしくなり、包丁を台の上に置いた。

「全く、女の顔に傷をつけた罪は重いわよ。責任取ってもらうんだから」

「は？」

キールは、言われてアイネの顔を見ると、彼女の左頬に一筋の赤黒い線があった。

だが、キールは関心がなさそうに視線をそらし、厨房の出口に歩いていった。

その後、キールは自分の部屋にずっとこもっていた。

しかし、食事の時は全員、部屋でも、夜にはアイネがいるので、キールは一人になることがなかった。

そうして、キールが施設に来ての一日目は終わった。

大事な人に会える日<番外編><キール>

「キール！」

アイネが突然部屋の扉を開けて入ってきた。

「何だ」

キールは驚いた素振りはないものの、怪訝な顔をしてアイネを見た。

「というのも、アイネがいつもとは違う見慣れない格好をしていたからだ。」

大きな黒いトンがり帽子をかぶり、いつもズボンをはいている彼女には珍しくスカートをはいていた。

「今日何の日だかわかる？ とりあえずこれ着て」

アイネはキースの様子を気にした様子もなく、キースに布の固まりを投げ渡した。

「だから、何なんだ」

キースはやや苛立った口調で聞き返した。

「いいから着てきなさい。わかった？ 言うときかないと、無理矢理着せるからね。みんな食堂にいるから、着替え終わったら来るんだよ」

そう言うと、アイネは扉を閉めた。

有無を言わさぬ雰囲気、キースは口を挟むことができなかった。洩々、渡された布の固まりを広げてみて、彼は数瞬間まることになる。

「ああ、キール、来たね」

食堂の隣には、皆が集まれるような広場があり、そこがいつも何かある時の集合場所になっている。

そこに来た人物の姿を認め、アイネは声をかけた。

「……………」

キールはアイネを睨み付けたまま、食堂に入り、近づいてきた。

「やっぱ似合ってるね。うん、見た時あなたにはこれが似合ってるんだよ。私がつたんだけど、着心地はどう？」

「何だ、これは」

笑顔で話すアイネに、キールは鋭い表情を崩さぬまま問う。

明らかに怒気を含んだ声だった。

「ああ、私も本で初めて見たんだけど、西の国に伝わる人の血を吸って生きる化け物らしいよ。確か吸血鬼っていったかな」

「キールかっこいいね。僕なんかかばちゃ頭だよ」

アイネとキールが話していると、横にいた少年が話し掛けてきた。誉められているのに、キールは気に入らないのか、その少年も睨んだ。

だが、少年は気にした様子がなく、笑顔だ。

ここの子供達は、誰もキールを恐れない。

それがまたキールには居心地が悪かった。

「なんでこんな格好をしなきゃならないんだ」

「あ、そういえば言ってなかったね。これも西の国のお祭りらしいんだけど、今日はご先祖様が帰ってくる日なんだって。で、私達はそれをご先祖様と似たような格好をしてお出迎えするらしい」

キールはまだ納得がいかない、という顔をしていた。

「なぜ西の国の祭りをするんだ。俺はそんな祭りは知らない」

「私も知らないけど、とりあえずイベントごとは楽しいから便乗し

とくのよ。実際、ご先祖様に会ったって人もいるから、キールも誰かに会えるかもよ」

アイネの最後の言葉を聞くと、キールの表情は渋いものになった。「別に会いたいヤツなんかいない」

そう言つと、キールは背を向けて食堂から出て行ってしまった。

「アイネ、またかい？」

すかさず、セシドの声がアイネの背後からした。

アイネは大きく体を震わせ、恐る恐る後ろを振り返つた。

「あはは、どうも私は嫌われてるようですね……」

アイネの視界に入ってきたセシドの顔は笑顔だったが、アイネにはその笑顔が本当の笑顔には見えなかった。

仮装のゾンビのようにボロボロの格好も、余計に威圧感が増していた。

そしてアイネは、どうしようもなく、苦笑いを浮かべた。

「君は少し強引なところがある。それで格好だけさせても、心から楽しむことはできない。ちゃんと、キール君も参加させるようになるんだよ」

「……………はい」

セシドの威圧感に、アイネは逆らうことができなかった。

その頃、キールは施設の裏にある森の中を歩いていた。

あまり人気のない静かなこの場所を、キールは気に入っていた。

ある程度の場所まで来ると、キールは一つの木の側に腰を下ろした。

今日は特に天気良く、木々から入る光、涼しい風が心地良かった。

腰掛けると、木々の匂いを味わうように、キールは目を閉じて息

を深く吸った。

葉が生い茂っている時は緑深い匂いだったが、今は木の実などの芳しい匂い、土の匂いが濃くなっていた。

そして息をつき、次に目を開けた瞬間には、目の前に広がるのは森ではなかった。

そこはただ白が埋めつくす世界だった。
光だけが存在するような世界だった。

「あれ、あんたどうしたの？ こんな所で」

ふと横から女性の声がして、キールは驚いてそちらを見た。

「！」

そしてさらに驚いて、キールは一瞬言葉を発することができなかつた。

目をやった方向にいたのは、見覚えのある女性だった。

「アイネ?!」

キールは思わず、心当たりの女性の名を叫んだ。

だが、目の前の女性は首をひねり、おかしそうに微笑んでいた。

キールも、落ち着いてよく見ると、アイネよりも年が上のようだし、黒いスラックスにハイネック、それに金色のネックレスや腕輪、鎖などを多くつけていて、どうやらアイネではない、ということがわかった。

よく見ると、化粧もやや派手だった。

「お前は、誰だ？」

いちいち施設にいた者達を覚えているわけではなかったが、とりあえず施設に来てから、目の前の人物を見た記憶はない。

「私はあんたを知っているけど、あんたは私を知らないだろうね」
目の前の女性は、相変わらず微笑みを浮かべてキールを見ていた。
キールは、妙に胸がざわつく感じを覚えていた。

感じた気持ちが変わらず、キールは目の前の女性を睨みつけた。

「全く、そんな目で私を見ないでよ。何でそんな子になっちゃったのかね」

「自分の名を名乗らないようなヤツは信用できない」

キールの言葉に、女性は一瞬目を見張り、すぐにまたおもしろそうに笑みを浮かべた。

「それもそうね。いやあ、すっかり大人になって、私は嬉しいよ」

「お前は誰だ」

キールは苛々が増した声で言う。

「よく覚えておくんだよ。もう二度と言わないからね。私の名前は、カリタ、だよ」

女性　カリタは自分の名前を特に強調して、区切って言った。

キールは、どこかで聞いたことがあるような気がしたが、わからなかった。

キールはいつまでもたまり続ける靄のために、また口を結んで黙り込んだ。

カリタはそれを変わらずの笑顔で見ている。

「私を覚えていないのも無理ないよね。私はあんたが赤ん坊の時にあんたを置いて外に出て、死んじまつたんだからね。あんたを置いていった罰なのかもしれない。でもね、あんたが嫌いだったからあんたと離れたんじゃないんだ。それだけはわかっておくれ。ただ私が腑甲斐なかつただけなんだ……」

「待ってくれ！　お前は……！」

キールがカリタの言葉に、ふと思い当たり、カリタに触れようとする。

だが、その瞬間に周りの光が強まり、目の前の女性も、視界が真

っ白になった。

次にキールの視界に色が宿った時、目の前に広がるのは馴染みのある森の中だった。

「あ、気がついた？」

そして、キールのすぐ前にいる女性が、安心したように声をかけた。

「かあさ……！」

キールはさすがのように目の前にいる人物の肩を掴もうとするが、ふと気づいて口を閉じ、手を止めた。

そして、キールの突然の行動に戸惑いを見せる人物をまじまじと見つめた。

「……………アイネ…………？」

そして呼ばれたアイネは、苦笑いを浮かべてうなずいた。

「……………大丈夫？」

キールは恥ずかしくなり、アイネを突き飛ばすようにして離れ、立ち上がった。

「い、今のは誰にも言うな！」

アイネの視線を避けるように、キールは背を向けた。

「大事な人に、会えた？」

アイネはキールの後ろに立つと、優しく彼の頭を撫でながら聞いた。

キールは、なぜかその場から動けなくなった。

「……………今日は本当はね、会いたいと強く願う人に会える日なんだよ。

その願いが、意識されてるかされてないかに関わらず。だから、みんなこのお祭りを楽しみにしてるんだ」

「……会えるかもわからないのに？ 会えたとしたって、何も変わらないのに？」

「キールは、何も感じなかったの？」

「……」

アイネの言葉に、キールが黙り込んだ。

「私もね、去年懐かしい人に会えたの。私はその人にいつも『ありがとう』と言いたかったのに、結局彼女が病気で死んでしまうまで私は伝えられなかった。でも、去年のこの日に彼女に会えて、私はやっと言うことができた。彼女は笑ってた。私はそれだけでよかったと思った」

アイネは静かに語る。

キールは黙って聞いていた。

「……さて、そろそろみんなの所に行ってみないかい？」

アイネが何もなかったかのようにキールの肩に手を添えて言うと、キールはゆっくりとうなずいて、静かに歩き出した。

アイネも、その後ろについて歩き出す。

吸血鬼と魔女という異様な出で立ちの二人が、施設の建物の中に入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2339t/>

あの頃、君は知らなかった。

2011年5月29日12時26分発行